

文学教材を活かした主体的学習と評価

TOEIC Writing Test を中心に

江口 智子

1. 本研究の背景・目的

日本英文学会第 90 回全国大会で発表した研究(2016 年度～2017 年度、東洋大学生命科学部・食環境科学部 1 年生選択必修科目「Integral English I/II (ADVANCED)」の履修生延べ 36 名を対象に、英文学作品リトールド版と原書を用いて各学期 3 回の TOEIC Listening & Reading 形式テストと各学期末の学生アンケートを中心に教育効果を検証)において、いくつか問題点が浮かび上がったため、工夫改善を加えて 2018 年度～2019 年度に継続調査した。問題点とは、本教授法が教員のモチベーション向上及び学生の主観的な英語力・英語学習意欲向上に有効であることが示唆された反面、TOEIC L&R 形式テスト結果との明らかな相関関係は見られなかったこと、テキストについてリトールド版では物足りなさを感じる学生がいた一方で、原書では教員の内容解説中心となり、学生が受け身になりがちであったことである。

今回の研究の目的は、文学作品を活用した英語教育が学生の英語力向上にどれだけ効果があるのかを、学生主体の授業を通して TOEIC Writing 形式のテストと学生アンケートで実証することであった。

2. 調査方法

調査対象は 2018、2019 年度に東洋大学生命科学部・食環境科学部 1 年生選択必修科目「Integral English I/II (ADVANCED)」を受講した延べ 57 名であった。前回同様、学生は 4 月の TOEIC L&R IP テストスコアで 400 点以上を目安に通常クラスに替えてこのクラスを履修することができたが、実際、履修生の 4 月時の TOEIC L&R IP テストスコアは 205～965 点であった。また、I は春学期(前期)、II は秋学期(後期)に開講され、履修生は入れ替わる可能性があり、前回調査の問題点の一つであったが、今回は学内教務委員の協力で時間割編成が配慮されたためか、春・秋学期で履修生はほぼ同じで、通年での教育・調査が可能となった。

使用テキスト選択は、教員(調査者)の研究専門分野(19 世紀の英文学)と履修生の専門分野(生命科学)両方を加味して行われた。2018 年度春学期は Charles Dickens の *Oliver Twist*、秋学期は Emily Brontë の *Wuthering Heights*、2019 年度春学期は Ernest Thomson Seton の *Wild Animals I Have Known* から“Lobo, the King of Currumpaw”と“The Pacing Mustang”、秋学期は Thomas Hardy の *Tess of the D'Urbervilles* を選んだ。前回調査における学生からの「リトールド版が簡単すぎる」というコメントを受け、今回は最初から原書を用いた。ただし、2018 年度春学期に学生が長編小説原書理解に苦労している様子を見たことから、2019 年度は春学期にリアリズムの短編小説、秋学期に抽象的な長編小説というように段階的に難易度を上げる工夫をした。

教授方法において、前回調査時と特に違う点は履修生に毎回授業開始時、Reading Log(当日の約 10～40 頁分を読んだ印象や感想を英語で作文)提出を求め、毎回文法添削や内容のコメントのフィードバックを付けて返却したことである。また、履修生に輪番でテキストの概説・英語での質問(内容理解や意見を問うもの等)提起とグループディスカッション統率を課し、適宜教員がフォローしたことである。輪番発表形式により学生の主体性を促し、Reading Log の課題と添削により当日担当以外の学生も予習をし、ライティングスキル向上できるように図ったのである。テキストの映画版の活用について、時間の都合で 2018 年度秋学期は十分に行えなかったが、学生アンケートで要望が見られたことから 2019 年度はできるだけ時間を取り、テキスト購読後に全編上映してディスカッションをしたり、グループパフォーマンスの指定場面だけでも参考に上映したりした。

また、客観的な英語力向上の指標として、前回の TOEIC L&R 形式テストに替えて各学期 3 回(学期始めの Level Check Test、半ばの Progress Test 1、終わりの Progress Test 2)の TOEIC Writing 形式テストを行った。公式の TOEIC Writing テストに準じ、写真描写問題(2 問 3 点満

点)、Email 応答問題(1問 4 点満点)、意見を述べる問題(1問 5 点満点)、合計 12 点満点で構成し、解答方法・時間は筆記式で 40 分とした。問題内容は TOEIC に準じてビジネスに関するものも出題したが、時節や大学生活に関するものやテキストに関するものも織り交ぜた。採点は TOEIC Writing テストのルーブリックに準じ、Level Check Test 終了後にルーブリックを履修生に配布し、毎回テスト後に解答・解説を行なった。なお、学生には本テストが TOEIC Writing 形式テストに準じたものであることを伝えていたが、成績評価の配分は 5% だけであり(シラバスに明記)、本調査目的については知らせていなかった。

その他、前回調査を踏襲したのは、ほぼ毎回の重要単語・文法のハンドアウト配布と翌週の小テスト、各学期 2 回のエッセイ課題、各学期末のプレゼンテーション(2019 年度春学期はエッセイに基づく個別発表で、それ以外はテキストの指定場面のグループパフォーマンス)及び学期末の授業アンケート実施(方法・項目は前回と同様)であった。

3. 調査結果

授業内で実施した TOEIC Writing 形式テストの結果は、ほぼ右肩上がりとなった。個人差はあったが、特に 4 月時の TOEIC L&R IP テストスコアが 400~500 点台で伸びが見られた。(例: 4 月 TOEIC L&R IP テストで 490 点、春学期授業内 Level Check Test で 7/12 点→春学期授業内 Progress Test 2 で 10/12 点)。各学期末の授業アンケート結果は 2016~2017 年度の調査と同様に賛否両論があり、総じて高評価であった。数値ではボキャブラリー、読解力、ライティングスキル向上の項目で特に高かった。自由記述では、エッセイ執筆を通じたライティングスキル向上や達成感に関するコメントやグループパフォーマンスの楽しさについてのコメントが目立った。

4. 結論・課題・今後の展望

結論として、英米文学原書をテキストとし、学生に Reading Log 執筆や輪番の発表やグループパフォーマンスを課して主体的な学習を促す本教授法は、教員は言うまでもなく学生のモチベーション及び英語力向上、とりわけ TOEIC Writing 形式テストスコアに表れるようなライティングスキル向上には極めて有効である。ただ、履修生の英語レベルの差から、学生の主体性を尊重しつつも、教員が適宜介入・フォローすることも大切であると感じた。また、クラスメイト同士の関係が、学生の学習・授業参加意欲の大きな要因となることを改めて認識した。

様々な英語力評価方法があるが、それらを適切に活用し、成績評価に反映させることが大事であると思う。今回は調査対象授業の履修者数が通年で一定数確保されたが、効果的な教育や研究を行うには学内教務委員の理解・協力も重要であると痛感した。今後は学生の英語発話のモチベーションと能力を伸ばすために TOEIC Speaking 形式テストを導入することも検討している。これからも文学教材の特長を活かし、学生の 4 技能バランスの取れた英語力向上を目指したいと思う。

最後に、新型コロナウイルス渦中、ウェブカンファレンス開催に尽力された大会準備委員の先生、質問を寄せてくださった先生に心から感謝の意を表したい。

参考文献

Dickens, Charles (2003). *Oliver Twist*. London: Penguin.

Hall, Geof (2015). *Literature in Language Education* (2nd edn). London: Palgrave Macmillan.

Hardy, Thomas (2003). *Tess of the D'Urbervilles*. London: Penguin.

Paran, A. and Sercu, L (eds). (2010). *Testing the Untestable in Language Education*. Bristol: Multilingual Matters.

Seton, E. Thompson (2000). *Wild Animals I Have Known*. New York: Dover.

江口智子(2018). 「目標の狭間で—理系学生の英語授業で文学を用いる効能」、『第 90 回大会 Proceedings: The 90th General Meeting of The English Literary Society of Japan(付 2017 年度支部大会 Proceedings)』、27-28.

日本英文学会(関東支部)編(2017). 『教室の英文学』、研究社.